
パリの平日

無銘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パリの平日

【Nコード】

N8033Y

【作者名】

無銘

【あらすじ】

組織の都合で家族を利用され、そして殺された男とその仲間、組織の都合で家族に利用され、そして蔑まれた少女と出会う。少女の実父が少女の命を狙う中で、三人は何を見るのか…

独自解釈・設定、原作崩壊、キャラ崩壊、時系列矛盾、知識不足等核地雷級の地雷要素がかなり含まれています。読まれる際には十分ご注意ください。

（前書き）

本作品は原作レイプを通り越して敵の大軍の前に一機甲猟兵小隊を置き去りにするくらいの暴挙を犯しています。読まれる際には十分ご注意ください。

それと非常に冗長な上、言葉使いや訛りもおかしいのでご注意ください。

なおシャルロット・デュノアの搭乗ISの正式名称は『ラファール・リヴァイヴ・カスタム（ローマ数字の2）』ですが、こちらの画面では数字部分が表示されない為、便宜上『ラファール・リヴァイヴ・カスタム2（算用数字の2）』と表記させて頂いてますのでご了承ください。

既存の兵器をあらゆる面で凌駕する性能を持つ『インフィニット・ストラトス（IS）』。

この篠ノ之束という天才科学者が一から創り上げた兵器は、何故か女性にしか動かす事が出来なかった。

それをきっかけにラディカルフェミニズムの活動も盛んになり、社会はそれまでとは逆の女尊男卑となるなど大きく変わった。

だがそれを揺るがす大きな事件が起こる。世界でただ一人ISを動かせる男性『織斑一夏』の登場：後に『オリムラ・ショック』と呼ばれる事件である。

IS学園の入学試験で彼がISを動かしてしまった事が発覚して以降、各国は事実確認と情報収集に追われ、その為に自国のIS操縦者をIS学園に転入させる国も出てきている。

そんな『オリムラ・ショック』の混乱が覚めやらぬ中、今度はフランスで世界で二人目となるデュノア社所属の男性IS操縦者『シャルル・デュノア』の存在が公表され、『彼』もまたIS学園へと転入した。

：ところがそれは単なるデュノア社の宣伝工作に過ぎず、『シャルル・デュノア』が実は女性であった事、そして彼：いや彼女に織斑一夏及びそのIS『白式』のデータを盗むようデュノア社が命令した事がIS学園側に発覚する。

そこでIS学園側は、学園への『外部不干涉』を定めた国際規約に対する重大な違反であるとフランス政府及びデュノア社に厳重な抗議を行い、更に『国際IS委員会』がデュノア社に再発防止を徹底するように厳命し、委員会から監査役を送り込む事になった。

これを受けてフランスのアラゴ国防大臣を始め軍のIS関係者は辞任、デュノア社も社長のレオン・デュノア及び役員全員が引責辞任するという一大スキャンダルへと発展した。

これは後に『デュノア・スキャンダル』と呼ばれるこの一連の騒動の中で起こった、あるちよつとした出会いの話

「…脈拍、血圧その他異常なし。至って健康だよ」

カルテに情報を書き加えた後、白衣を着た男：志度敬太郎は自分の目の前で椅子に腰掛けて座っている少女に微笑みながら告げる。

ここはデュノア社の本社ビル近くにあるIS操縦者の健康管理や治療を担当するメディカルセンター。志度敬太郎はこの所長であり、今日の前に座っている少女：シャルロット・デュノアの『主治医』でもある。

パワードスーツの一種であるISは操縦者の体調その他が既存の兵器よりダイレクトに発現する。その為大抵ISを扱う組織にはその健康管理を行う専門のスタッフ…『主治医』が存在する。

特に国家代表もしくはシャルロットのように代表候補生クラスともなると、相当の知識と経験を積んだ『名医』と呼ばれるクラスでもなければ『主治医』など務まらない。

そして志度敬太郎は間違いなくその『名医』に当たる人物である。現に彼はシャルロット以外にも歴代フランス国家代表の『主治医』も務めている。

「なら日本に…IS学園に戻っても大丈夫、という事ですか？」

「ああ、少なくとも健康上の問題は無いよ」

目を輝かせるシャルロットに苦笑しながらも敬太郎は頷く。

シャルロットと敬太郎の付き合いは半年程とそこまで長い訳ではない。

だがIS学園に行くまでデュノア社内で『妾の子』と陰口を叩かれ孤立していたシャルロットに対しても時には優しく励まし、時には厳しく叱咤するなどまるで父親のように彼女に接する敬太郎に対して、シャルロットは一定以上の信頼を置いていた。

特にシャルロットの無茶で発生したIS墜落事故に際して、敬太郎はシャルロットの浅はかさを厳しく叱りながらも、寝る間も惜しんで付きつきりで治療に当たっていた事はメディカルセンターのスタ

ツフの間で語り種になっている。

「確か、織斑一夏くん、だったね…君の想い人は」

「な、何で分かるんですか!？」

「君の主治医だしそれくらいは分かるさ。君は割と顔に出やすいからね。IS学園へ定期検診に行った時一度見たけど中々いい男ぶりじゃないか」

敬太郎はシャルロットの想い人…織斑一夏を定期検診としてIS学園を訪れた際に一度直接見た事がある。

基本的にIS学園にも優秀なメディカルスタッフがいるので定期検診も任せようと思えば出来るのだが、敬太郎はそれをよしとせずわざわざフランスから日本まで飛んでシャルロットの定期検診を行っていた。

「そんなに僕…私って顔に出やすいんですか？」

「医者からすればね。…その様子じゃまだ『シャルル・デュノア』だった頃の癖は抜けてないか」

そう言っただけ敬太郎は苦笑する。

彼女は男と偽りIS学園に入学し、情報収集に当たっていたがIS学園に女であると発覚した為、現在は本国フランスに帰国している。

なおシャルロットのIS学園転入を進言したのは他でもない敬太郎だが、その際に男装させる事には最も強硬に反対していた。

(…彼女も、織斑一夏も、自分の意志で行動や未来を決める権利があるだろうに…)

敬太郎は内心シャルロットを道具としてしか見ていないデュノア社社長以下の役員達や国際IS委員会の現状を嘆く。

人間工学の世界的権威であつた志度敬太郎は、『ネオショッカー対策委員会』の解散以降は日本の北海道で診療所を開いていた。

そんな時に友人に口説かれ国際IS委員会の設立に携わり、現在ではその創設メンバーの一人として国際IS委員会に所属している。

ISの事は専門外だが、パワードスーツの一種である以上やはり人間工学からの知見も必要とされたのであろう。

だが織斑一夏の処遇を巡り各国が欲望を剥ぎ出しにしてその身柄を確保しようとしている委員会の現状を嘆き、『帰属は織斑一夏本人の意志に任せるべき』という意見書を提出した後にデュノア社から招かれ、国際IS委員会から派遣される形でデュノア社メディカルセンター所長に就任した。

そのデュノア社でも大人の都合で少女の一生を弄んでいる状況なのだから嘆きたくもなる。シャルロットのような患者を投げ出す気はないから辞めるつもりはないが。

「とにかく、今日の夕方の便で日本へ行くからと言ってはしやぎ過ぎないようにね?」

そこで思考を打ち切ると敬太郎はシャルロットにそれだけ告げて診

療を終えた。

「『私は貴方の人形じゃありません』だと…妾の…卑しい妾の子の分際で！拾ってやった恩を忘れてこの私に…レオン・デュノアに逆らうとは！」

デュノア社社長のレオン・デュノアは現在社長室で怒り狂っていた。先ほど自分と会ったシャルロット・デュノアに、『シャルル・デュノア』が男性ではないとバレるという失態を犯したにも関わらず、父親である自分と縁を切る宣言をした上で命令を聞く気はないとまで言われては怒りの収まりようがない。

「何より忌々しいのはIS学園の連中だ…何が『外部不干涉』だ！そんなものをつくの昔に忘れ去られておろうが！」

しかも追い討ちをかけてくるかのようにIS学園側から『シャルル・デュノア』の一件に関してデュノア社及びフランス政府に対して、レオンがシャルロットと会う直前に正式な抗議が届いている。

しかもよりによって『外部不干涉』などという半ば有名無実化した規約を持ち出して、だ。

実際問題ＩＳ学園はどんなに独立自治を謳っていても、その潤沢な運営資金は各国政府やデュノア社のようなＩＳ関連企業からの出資で賄われている以上各国政府や企業の意向を完全に無視する事は出来ない。

特に土地を提供し人員その他もＩＳ学園側に供与している日本政府のＩＳ学園に対する発言力は公こそされないが、実はかなり大きい。弱腰と言われる国だが、日本はただＩＳ学園に土地と金と人を差し出すだけで、そこから得られる貴重な技術情報は全世界に公開されるという一見割に合わない役割を引き受けた結果、世界唯一のＩＳ操縦者育成機関に対して少なからぬ影響力を保持しているのだから中々に強かな国なのかもしれない。

もともと、影響力自体を保持はしていてもそれを行使したのは日本の国防軍とコネを持つ織斑千冬の意を受けて、弟の織斑一夏の特例での入学許可：ＩＳ学園の規定では男性が入学出来るという条項が無かった為彼の入学は特例として認められ、一夏入学後に規定が改正されＩＳさえ起動させられれば男性の入学も許可されるようになった：を学園に『打診』した時くらいなのだからやはり弱腰なのかもしれないが。

そんな状況である上他の国や組織もデュノア社程ではないにせよ、ＩＳ学園に教員や生徒という形で人員を送り込み情報収集：より露骨に言えば諜報活動に勤しんでいる。

そんな『外部不干涉』を厳密に守る組織など現状インターポールくらいしかない。国際的に犯罪捜査を行うインターポールが国際規約を無視したら大問題だが。

そんな懲が生えたような代物を今更持ち出してこちらに抗議するのは片腹痛い。

更に言えば国際ＩＳ委員会の方でもこれを国際的信用に関わる重大な問題とみなし、何らかの懲戒処分をフランス政府とデュノア社に課す方向で動き出そうとしているようだ。

何より忌々しいのはＩＳ学園側が『シャルル・デュノア』を本来の名前と性別で…すなわち『シャルロット・デュノア』として再入学させる用意がある、などと言ってきた事だ。

レオンはそんな事などさせる気は毛頭無かったが、下手にこの問題を拗らせればそれこそデュノア社に国際ＩＳ委員会から重い処分が下りかねない、という志度敬太郎博士の忠告を受け渋々引き下がった。

それでもせめてもの抵抗として恩知らずの卑しい妾の娘であるシャルロットの身元保証人及び保護責任者として入学書類にサインする事を拒否し、代わりに志度敬太郎博士がシャルロットの身元保証人及び保護責任者となったが。

「だが、只では済まん！あの口の減らない卑しい妾の娘に色々余計な事を喋られては困るからな…！」

残念ながらレオンにはシャルロットを無事ＩＳ学園に再入学させる気などさらさらない。

シャルロットはデュノア社においてＩＳ開発に深く携わってきた優秀なＩＳ操縦者だ。勿論デュノア社が極秘で行ってきた非合法活動

に關しても彼女は承知している。

そんな事を外部に話されたらデュノア社の信用は完全に失われ、下手をすれば倒産だ。

しかも悪い事にIS学園に抗議され、国際IS委員会にも目を付けられている現状そんな事を話されたらデュノア社の倒産だけで済む問題ではなく、最悪フランス政府の監督責任が問われる可能性もある。

だからこそ口封じの為にシャルロット・デュノアはこの世から…消す。

「IS学園にはIS学園の『法』があるように、フランスにはフランスの、そしてこのデュノア社の『法』があるのだよ…入学前にこのフランスで『行方不明』になったり『事故死』したのであれば連中も表立っては文句をつけられまい」

確かにIS学園に入学してしまえばシャルロットに手出しは出来ない。あんな抗議を受けた後では尚更だ。

だがまだ『シャルロット・デュノア』はIS学園に入学した訳ではない。再入学書類は既にIS学園に送付されているが、IS学園での面接及び簡易な適性検査を経なければ正式にIS学園に入学した事にはならない。

そこにチャンスがある。『シャルル・デュノア』はともかく、まだ入学していないシャルロットには『外部不干涉』の規定の効果は及ばない。

だからこそ、シャルロットにはフランスで『行方不明』もしくは『

事故死』して貰う。こちらがそう言い張ればIS学園側もそういう事にするしかない。口出しすれば『外部不干涉』を拡大解釈した非常に悪質な内政干渉と取られてもおかしくないからだ。

幸いレオンは政府や関係機関へのコネを持っているのでシャルロットを『行方不明』や『事故死』扱いするのは問題無い。

レオンは電話を取り出すと何処かへ掛け始める。

「…私だ。久しぶりに『仕事』の話がある。1時間後に社長室まで来たまえ」

デュノア社にはシャルロットのように自社に都合が悪い人間を『行方不明』や『事故死』させる…つまり秘密裏に始末する汚れ役として社長直属の『始末屋』と呼ばれる集団が存在する。

この『始末屋』の存在を知るのはデュノア社内でもレオンの厚い信任を受けた数人の重役のみで、その実情を完全に把握しているのはその構成員を除けばレオンのみだ。

シャルロットに至っては『始末屋』の存在すら知らないし、レオンも彼らの存在をシャルロットには一切教えていない。

そしてレオンは改めて憎々しげに一人言を続ける。

「覚悟するがいい、シャルロット…私に逆らった者がどうなるかの報いを…デュノア社の『法』に逆らった罪への罰を、裁きを受けて貰うぞ！」

…このレオン・デュノアという男、人格的に非常に問題がある。そもそもデュノア社の創業者である実兄のジャン・デュノアを暗殺してこの地位を手に入れたと社内ですらまことしやかに囁かれている。更にこの『始末屋』を創設したのもレオンである。例えそれが実の娘であろうともこの男にとっては関係ない。邪魔者は消す…ただそれだけだ。

『自業自得』、『因果応報』、『身から出た錆』といった言葉がこれ以上なく当てはまる…それでいて全くそれに気付かないレオン・デュノアは社長室で『始末屋』の到着まで椅子に腰掛け待っている事にした。

パリ市内を横断するように流れる『セーヌ川』の河岸にある通りを、トランクを持った旅装の少女…遠目からだ和美少年にも見えなくもないが…が歩いている。とても気分が良いのか、時折鼻歌らしきものも聞こえてくる。

（やっと…やっと…ずっと一緒に居られるんだ！）

一人の少女として想い人の…織斑一夏そばに居られる。何よりも

その少女…シャルロット・デュノアにはそれが嬉しかった。

彼女が男のIS操縦者『シャルル・デュノア』としてIS学園に居た頃、同じく男のIS操縦者…こちらは少なくとも身体的には間違はなく本物の男だが…の織斑一夏と寮のルームメイトになっていた。

それから『男同士』として訓練や私生活を通して徐々に一夏と友情を深めていった。

勿論それは本来の目的…一夏とその専用機のデータ入手…の為でもあったが、一夏との間に感じた友情や信頼は間違はなく本物だ。或いは単に気付いていなかっただけで、志度敬太郎博士が前にシャルロットに指摘したようにこの頃から淡い恋心を抱いていたのかもしれない。

だがそんな生活も長くは続かず、ある時ちょっとした偶然から一夏に女性であるという事が発覚してしまった。

そこで『シャルル』…シャルロットは一夏にだけ事の真相を告げてIS学園から去ろうとした。

しかし一夏はそれをよしとしなかった。一夏はシャルロットを必死に説得し何とか思い止まらせ、更には実姉でIS学園の教師をしている織斑千冬に筋を曲げて土下座せんばかりの勢いでシャルロットが学園に留まれるように頼み込んだらしい。

そこでIS学園は『シャルル・デュノア』の一件をデュノア社及びフランス政府に抗議すると同時に、『シャルル・デュノア』がシャルロット・デュノアとしてIS学園に再入学出来るように取り計らってくれた。

そしてシャルロットはそうやって自分の『居場所』を…誰にとつても大切な筈なのに、自分には殆ど無かった『居場所』を作り、守ってくれた織斑一夏へはつきりとした恋心を抱くようになっていた。

そんな訳なのだから保護責任者でもある主治医の志度敬太郎から、IS学園へ…愛する一夏の下へと戻っていいとお墨付きを得たのだから嬉しくないはずが無い。

「…まだまだ時間もあるし、近いから『あそこ』に寄っていいかな」

上機嫌のシャルロットが時計を見るとまだ正午だ。乗る予定の飛行機の搭乗時刻には余裕がある。そこで暇潰しもかねてこの近くにある行き着けのカフェに行く事を決め、歩き出した。

本当ならわざわざフランスまで戻らなくとも良かったのかもしれないが、実父のレオンに今後縁を切ると直接言つてやる為と、再入学手続きに必要なメデイカルチェックも兼ねてパリのデュノア社本社ビルを訪れた。

本当ならこのままISを使って日本へ直行したいのだが、そんな事をしたら色々な国の領空を思い切り侵犯するので止めておいた。

飛行機の便も夕方しか空席が無かったのでやむを得ないがそれで日本に戻る事にした。

そんな事を考えながら歩いているとカフェに着く。河岸にある少し洒落た感じのカフェだ。屋外席はセーヌ川の景色を存分に堪能出来る、シャルロットお気に入りの場所だ。

ウェイターの話では現在満席で、誰かと相席で良いのなら屋外席の一つに座れるらしい。

最高にハイな状態のシャルロットは二つ返事でそれを承諾すると、ウェイターに案内され席へと向かう。

その席には二人座っていた。一人は一夏と同じ日本人らしい男だ。私が好きな一夏程では無いが顔立ちが整っており、爽やかな印象を抱かせる。ウェイターが相席は大丈夫かその男に話し掛けると男は笑って快諾し、シャルロットの方を見て席を勧める。

シャルロットは会釈すると席に座る。しかし視線はずっと男の連れらしき『何か』に向いている。

(…着ぐるみ?)

その男の連れであるそれは鎧のような、着ぐるみのような物を着た『何か』であった。

全体的にどこか丸っこくて、間抜けそうで、とても愛嬌のある顔。近くに立ててある幟らしきものには『日本一』などと書かれている。

何が『日本一』なのかは気になる。気になるが今はそんなに重要な事じゃない。

(…かわいい)

…シャルロット・デュノアは年頃の、ごく普通の少女である。このどこか愛嬌のある『何か』をかわいいと思っても仕方ないのかも知

れない。

その『何か』は連れの男となにやら話している。関西弁、というやつだろうか。

しかし今はそんな事はどうでもいい。

(…かわいい)

『何か』はその大袈裟で愛嬌のある身振り手振りを交えながら男となにやら談笑しているようだ。

内容なんて知った事ではない。それより『何か』の身振り手振りの方が重要だ。

(…かわいい)

「…あの、俺の連れがどうかしました？」

流石にシャルロットがずっと『何か』を見ている事に気付いた『何か』の飼い主…もとい連れがシャルロットに尋ねるとシャルロットは我に返り慌てて首を振る。

「い、いえ！」

「…『がながんじい』、そろそろ上くらい脱いだら？」

「…せやな。そろそろ注文したのも来るやろし」

そう言つて『何か』…飼い主曰く『がながんじい』がその頭に手を掛け、着ぐるみらしき部分の頭部を外す。

そしてその中身を見たシャルロット・デュノアは驚愕と、そして絶望を込めて盛大に叫ぶ。

「い、いやああああっ！！あんなにかわいい着ぐるみの中に！変な男の人が！！」

「誰が変じゃい！誰が！！」

少し時間を巻き戻す。

セーヌ川のほとりにあるカフェのテラス席に二人の男が腰掛けていた。

一人はラフな格好をした東洋人の男で、足下にはスポーツバッグらしきものが置かれている。

もう一人は自作の鎧らしきものを全身に着こんだ男だ。顔は見えないが関西弁らしき言葉で話している。

「いやほんととおおきに！旅費だけやなくてわざわざ奢ってくれるな

んて流石洋はん！太っ腹や！」

「いや、気にしないでいいよ。旅は道連れ、ってヤツだしね。それにしても財布を摺られるなんて『がんだんじい』らしいといつかなんと言っか……」

鎧の男：がんだんじいは拝むように連れの男：筑波洋に感謝している。筑波洋の方は爽やかに笑いながら首を振っている。

筑波洋は昨日まで『ピレネー山脈』にある山のハンググライダークラブで、負傷したインストラクターの代わりにハンググライダーの臨時インストラクターをしていた。

しかし本来のインストラクターが怪我から復帰した為そこを辞し、次の目的地へと向かう為に『シャルル・ド・ゴール国際空港』のあるパリへとやって来ていた。

洋が乗る飛行機の便は翌日発なので本来なら今日このパリにいる必要はないのだが、現在はデュノア社のメディカルセンター所長を務める『志度ハンググライダークラブ』の『会長』：志度敬太郎博士の下を訪れる為にパリに滞在している。

博士の時間の都合もあり会うのは夜と決まったので、それまでの暇潰しとして街を散策していた所に、財布を摺られて困っていた『がんだんじい』こと矢田勘次とばったり再会した。

勘次の話では自分を追ってパリまで来たまでではないがその先の足取りを掴めなかったらしく、そこで財布を摺られ途方に暮れていたらしい。

そこで洋は勘次と行動を共にする事にした。勿論旅費から何まで全

部洋持ちという事になる。

そういう訳でたまたま手近なカフェに二人で入って以降勘次は洋に感謝し続けている。

そんな洋にウェイターが声をかけてくる。どうやら相席にして欲しいらしい。

洋は快諾するとその相席となる金髪の少女に笑いながら座るように勧め、その後勘次と談笑していたのだが…

（やっぱり、気になるよな…）

先ほどから少女は鎧姿の勘次をじっと見ている。確かに全身鎧を着てる男がこんなカフェに似付かわしくないのは客たちの視線で分かる。

そんな視線に気付いていないかのようにいつも通りに振る舞う矢田勘次は大物なのかも知れない。

「…あの、俺の連れがどうかしました？」

意を決して洋が少女に尋ねると少女はやっと我に返ったらしく慌てて首を振る。

「い、いえ！」

流石にそろそろ頼んだ物も来るだろうしいい加減脱がせようかと洋は勘次に声をかける。

「…『がながんじい』、そろそろ上くらい脱いだら？」

「…せやな。そろそろ注文したのも来るやろし」

そして勘次が兜部分を外すと少女はまるで見てはいけなかった物を見てしまったかのように叫ぶ。

「い…いやああああっ！！あんなにかわいい着ぐるみの中に！変な男の人が！！」

「誰が変じゃい！誰が！！」

そこに勘次のツツコミが入り現在に至る。

「ごめんなさい！本当にごめんなさい！」

「いや、そこまで謝らんでも…」

さつきから金髪の少女は顔を真っ赤にしながら勘次に謝罪している。最初は小言を言ってた勘次だが今ではばつの悪そうな顔をしている。

「そろそろ許してあげなよ、がながんじい」

「いや、もうとつくに許してるんやけど…」

「…そういう訳だからそろそろ謝るのは止めてやってくれないかな？」

謝り続ける少女と困り果てた勘次に苦笑しながらも洋は助け船を出す。

「しかし日本語が結構上手いんだね。まるで日本人と話しているみたいだ」

「あ、ありがとうございます。ちょっと前まで日本にいましたから」

洋は金髪の少女の流暢な日本語に感心していた。

洋は英語やフランス語なら問題なく使いこなせるし勘次も日常会話程度なら難なくこなせるが、やはり日本語が通じると色々やりやすい。

ちなみに先程の少女の叫びはフランス語である。勘次も完全には理解出来ずとも自分が変と言われている事くらいは理解出来たようだ。

そこにウェイターがやってきて三人分のコーヒーを出す。

そしてチップを渡しコーヒーに口を付けようとする…前に違和感に気付く。

早すぎる。少女の分がだ。いくら少女が常連らしいとはいえ俺やがんがんじいと一緒にというのはいくら何でもおかしい。それに…

「…ウェ이터が何でナイフを？」

懷にナイフを…しかも明らかに対人殺傷用の大型のを忍ばせているウェ이터がこの世界の何処にいるだろうか？

「逃げる！」

少女がとつさに地面に転がると、洋が叫びながらテーブルを蹴り上げ盾にするのと、ウェ이터がナイフを懷から出して突き出し、テーブルで弾かれるのはほぼ同時であった。

「がんがんじい！」

「任しとき！」

そして勘次は少女の手を引きながら、洋はスポーツバッグと少女のものらしきトランクを持つと一目散に駆け出していた。

「逃がすな！追え！」

ウェ이터の怒号が響くと客の一部や通行人が三人を追い掛けてくる。

「あいつら一体何やねん!？」

「俺が聞きたいよ！君は何か知ってるかい!？」

「いえ！私も分かりません！」

走りながら三人は集団の正体を考えるがまとまらない。

「お嬢さん何か命狙われるような心当たりある!？」

「少し!お二人は!？」

「わいも少し!」

「俺は多過ぎてどれだか見当もつかないよ!」

そんな話を話ながら追っ手を振り切ろうとひたすら走り続ける。

「とりあえず自己紹介しようか!俺は筑波洋!それでこっちが…」

「『日本一のスーパーヒーロー』がながんじいこと矢田勘次や!お嬢さんは!？」

「シャルロット・デュノアです!」

「ならシャルロット!もう暫く走ってあいつらを撒くよ!」

そしてパリを舞台に三人と男達の『鬼ごっこ』が始まった。

もし走っているのがオードリー・ヘップバーンとグレゴリー・ペックなら、追ってくるのがカメラマンなら、そして舞台が休日のローマだったら『ローマの休日』となっていただろう。

だが残念ながら走っているのは筑波洋と矢田勘次とシャルロット・デュノアであり、追っ手は鈍器や刃物を手に持ち、舞台は平日のパ

リである。

そんな優雅な『ローマの休日』からは程遠い殺伐と、そしてドタバタとした長い長い『ローマの休日』ならぬ『パリの平日』の幕はこうして開かれた。

さて、『ローマの休日』ではまずオードリー・ヘップバーン扮する王女は美容院で髪を切るが生憎シャルロット・デュノアにそうする気はないしそんな暇もない。

今はスペイン広場ならぬコンコルド広場でジェラートの代わりにパンフレットを片手にシャルロット・デュノアと筑波洋と矢田勘次は歩いている。

「…こんな事してて大丈夫なんですか？」

「まさか追われている人間が呑気にパリを観光してるなんて思わないだろ？堂々としてた方が却って気付かれないものさ」

シャルロット・デュノアのある意味当然のツツコミに筑波洋は笑いながら答える。

現在三人は洋の提案により、追っ手をやり過ごす事も兼ねて『パリジェンヌ娘』であるシャルロットの案内でパリの名所を観光している。

実際『観光』し始めて暫く経つが見つかる気配はないので洋の言うことは正しいのかもしれない。

「確かここでルイ16世とマリー・アントワネットが処刑されたんだったね」

「マリー・アントワネットってあれやる？『米がないなら肉を食べればいい』とか言っとったんやる？」

「パンとお菓子です！…それは後世の創作らしくて実際のマリー・アントワネットはそういう事を言っただけじゃなかったらしいですよ」

そんな事を呑気に話しながら、しかし周囲をそれとなく警戒しながら三人はコンコルド広場を散策していた。

或いは筑波洋とシャルロット・デュノアだけなら美男美女として絵になったのかも知れないが、右脇にいる鎧を来たがんがんじいこと矢田勘次が見事にそれを打ち壊す。

或いは矢田勘次とシャルロット・デュノアだけなら『美女とマスコミ』としてそれはそれで絵になる光景になったのかもしれないが、左脇の筑波洋が爽やかにそれを吹き飛ばす。

或いは筑波洋と矢田勘次だけなら男だけの二人旅として中々乙なものになったのかもしれないが、真ん中のシャルロット・デュノアが存在がそれを打ち消している。

そんな何処か雑然とした三人組は暫くコンコルド広場を歩いていたが

「いたぞ！」

「さすがに気付かれたか！二人とも行こう！」

「よしきた！」

「はい！」

漸く気付いた追っ手が迫ってくると荷物を持ち全速力で走り出す。
さつきからこの調子だ。

バイクや原付は置いてきてある上、ベスパなどない三人は自らの足でパリ市内をまたも駆け回る事になった。

「本当ならルーブル美術館とかエッフェル塔とかも見たかったんだけどね…建物の内部じゃあまり逃げ場が無いから仕方ないか」

「洋はん、ちゃんとそんな事考えとったんやなあ」

「…勘次さんは絶対普通に観光してましたよね？」

「バレた？」

「当たり前です！大体その手に持つてるクレープは何ですか！？」

「いやさつき洋はんからお金借りて店行って買ってきたんやけど…はい、これシャルロットちゃんの分。そんでこっちが洋はんの分」

「あ、ありがとうございます…」

「そこはツツコミ入れてくれへんと！」

「えっ！？えっ！？」

「ありがとう、がんがんじい。シャルロットも遠慮しないで食べられる時に食べといた方がいいよ？」

「洋さんも少しは勘次さんにツツコンで下さい！」

「シャルロットちゃん、諦めときや…洋はん、割とボケ殺しの素質あるから…」

現在三人は『ノートルダム大聖堂』の前まで来ていた。呑気に漫才をやっている三人を見て現在彼らが何者かに命を狙われ、そして追われている身であると気付く人間は中々いない。

流石に一緒にパリを走り回って逃走していく内にすっかり三人も打ち解けてきたのか趣味の話から恋の話まで色々と雑談が飛び交うようになった。

「…そして飛び立つと足下にそれまで自分が立ってて、目の前にそびえ立っていた山々が見えるんだ。あの時の感動と、そしてあの時感じた風の感触が忘れられなくてね。それ以来俺はそれに心惹かれちゃって、世界中を回ってはハンググライダーで飛び続けているんだ」

「お陰で今回も探すのめっちゃ苦労したんやけどな…」

「風の感触…ですか？」

「ああ。冷たくて、鋭くて、でもそれでいて温かく優しく包み込んでくるような…飛行機やISじゃ味わえないそんな不思議な感覚さ」

筑波洋が自らの趣味のハンググライダーの事を話せば、

「…さしもの『仮面ライダー』も敵に追い詰められて絶対絶命！その時この『日本一のスーパヒーロー』ががんじい様が駆けつけて仮面ライダーと一緒に並み居る敵をバッタバッタと…！」

「…絶対に嘘ですよ、洋さん？」

「えっと…いや…全くの嘘では無いと言うか…けど全くの真実でもないというか…」

「わいってそんなに信用ないん！？というか洋はんも全然フォローになつとらんで…！」

がががんじいこと矢田勘次が自分の武勇伝…かなり誇張されてはいるが…を語り、

「…実はそれだけじゃなくて幼なじみの子に『私の酢豚を毎日食べ

させてあげる』とまで言われてたらしいんですが…全然その真意にもその子からの好意にも気付いてないみたいなんです」

「それは…最早鈍感とか朴念仁とか唐変木ってレベルを越えてるよ
うな…悟りを開いてそうというか…」

「でもシャルロットちゃん、まだ諦めたらあかん！そんな遠回しが駄目ならストレートに、かつ大胆に行けばええ！そして何遍も何遍も通じるまで繰り返せばええ！そうすりゃいくらそんな鈍感男でもきっとシャルロットちゃんの気持ちに気付いてくれるはずや！」

「ストレートに…大胆に…何遍も何遍も通じるまで…分かりました！私やってみます！」

シャルロット・デュノアが想い人の鈍感さを愚痴り、二人に相談する
という事を暫く続けていた。

ふとシャルロットは洋と勘次になった事を尋ねる。

「…さつきから気になってたんですけど、家族の話とか、私が今何
をしているのかとか聞かないんですね…どうしてですか？」

「…俺もちよつと家族絡みの事はあんまり言いたくはないし、俺に
も色々と事情があるからね」

洋は苦笑しながら答える。勘次は珍しく黙ったままだ。

「でも…！」

「…分かってるさ」

更に言い募ろうとするシャルロットを洋が遮る。

「…分かってるさ。君に何か重大な事情があることも、連中が君の命を狙っているから俺たちに襲い掛かってくるってことも、俺もがんがじいも分かってる」

「だったらどうして…！」

「どうして君を置いて逃げないのか、って言いたいのかい？」

黙ってシャルロットは頷く。しかし洋は爽やかな笑顔を浮かべ答える。

「だって今までこうやって一緒に話して、走って、見て、聞いて、愚痴って、ボケて、ツツコんで、語り合って、ぼやき合って、そして笑い合ってきた仲じゃないか。『仲間』…って言った方がいいかな？」

「で、でも僕…私達は…」

「関係あらへん」

そこに今まで黙っていたがんがじい…勘次が加わる。

「シャルロットちゃんの事情も、付き合った時間の長さも、関係あらへん。こうやって一緒に過ごして、シャルロットちゃんと一緒に過ごしてこれで、わいはめっちゃ楽しかった。嬉しかった。せやか

らシャルロットちゃんが何であろうと関係ない。短い付き合いでも関係ない。わいにとってシャルロットちゃんは大事な『仲間』なんや。シャルロットちゃんがどう思ってるか知らんけど、わいはシャルロットちゃんの事大切な『仲間』やと思ってる」

「…勿論俺にとっても君は大事な『仲間』さ。だから君の事を放っておくなんて出来ない。だって大事な『仲間』なんだから。例えば君が俺達の事をどう思っている、俺達は君の味方で、『仲間』であり続けるよ」

笑顔で続ける洋は更に付け加える。

「それに言っじゃないか…『袖触れ合うのも管鮑の交わり』って」

「『それを言うなら『袖触れ合うのも多少の縁』です（や）」「

シャルロットと勘次が同時にツッコミを入れる。

「ご名答。けど本当は『たしろう』って言うのは『他』の『生』、つまり前世って意味なんだ。だからどんな出会いにも偶然なんてない。必然だって意味なんだよ？」

「必然、ですか？」

「ああ、だからこそ君と俺達が出会えた事を俺は大切にしたいと思ってる。こうして仲間になれた君との出会いを、ね」

暫く黙っていたシャルロットだがやがて口を開く。

「…なら私も、洋さんを…勘次さんを…『仲間』って思っても、いいですか？」

「何言うとんねん！当たり前やないか！」

鎧部分を脱ぎ顔をさらしていた勘次がニカツと笑う。

「喜んで。俺達で良かったらね」

洋がいつも通りの爽やかな笑顔で答える。

「…ありがとうございます！」

シャルロットもやがてはにかんだように微笑む。

「さて、それじゃそろそろシャルロットを空港まで送ってかないとね…日本行きの飛行機に乗り遅れたら洒落にならないし」

「な、何でそれを！？」

「さっきからずっと時計気にしてたし…飛行機のチケットがポケットから見えてたしさ。わざわざ付き合わせちゃってごめんね？」

「い、いえ。私の方こそ…」

「せやから今度会った時はお詫びとしてわいがクレープ奢ったるで？」

「なら今度は財布摺られないで下さいね？」

「シャルロットちゃん…かわいい顔して地味にエグい事言うな…と
いうか洋はんに対してはともかく、わいに対しては少々遠慮なくな
つとらんか？」

「だつて勘次さんですから」

「理由になつとらんのやけど!？」

「そこまでにしときなよ…タクシーとか使えないかな？」

「はい、この近くに乗り場があるのでそれを使えば」

「そんなら急ごか…シャルロットちゃんも大好きな大好きな『一夏』
君に少しでも早く会つて話したいやろし」

「勘次さん!」

「あだ!？」

「がんがんじい!？」

「ご、ごめんなさい!…ついうっかり!大丈夫ですか!？」

「い、いや…何とか…けどISの武器で殴るのはもう勘弁してや…
ほんまに死ぬかと…」

「す、凄い…人間つて意外と頑丈なんだ…今度一夏へのツッコミに
使ってみようかな…」

「死んでまうから止めたつて!…というか冗談でもそんな怖いこと小

声で言わんといて！」

「それにがんがんじいはちょっと普通の人より頑丈だから参考にしない方が…とにかく行こうか」

「おお痛たた…ほいきた」

「はい！」

そんな他愛もない事を話ながら三人の『仲間』達は笑い合いながらタクシーに乗るために歩き始めた。

タクシーの中の助手席に筑波洋、後部座席に矢田勘次とシャルロット・デュノアが座っていた。

「…狭い…」

「すまん、シャルロットちゃん…鎧がつかえて前に乗れなかったばかりに…」

本当なら勘次が前に乗るのが一番良かったのだが、その鎧がつかえてしまい、やむを得ず洋が前に座り、勘次はシャルロットと仲良く後ろに座ることになった。

勿論その分シャルロットのスペースが圧迫され、どちらもシートベルトもギリギリ締まっているレベルだ。

そしてタクシーは橋へと差し掛かる。ふと洋が前を見ると進行方向にはタンクローリーが止まっている。

「…あの」

「何か？」

「前に車が…！」

しかしタクシーの運転手は構わず進む。むしろアクセルを目一杯踏み込みさらに加速させてタンクローリーへと突っ込ませようとする。

「な、何を…？」

「…何を？見て分かりませんか？貴方達に…シャルロット・デュノアとその同行者二人に『乗っていたタクシーが何故かタンクローリーに突っ込んで事故死』して貰うのさ！」

それだけ言い捨てるとドアを開け運転手はタクシーから飛び降りる。

「クソ！連中の…！駄目だ！ギアチェンジが出来ない！」

ギアを必死に操作して止めようとするが、何か細工がされているのかギアは動かない。

「シ、シートベルトが…？」

「は、外れへん!？」

異変に気付いたシャルロットと勘次もシートベルトを外そうとするが外れる気配がない。

タンクローリーとの距離が迫ってくる。

恐らく今からブレーキをかけても確実にタクシーはタンクローリーと衝突する。

そう判断すると洋は改造人間としての人並み外れた怪力で自らのシートベルトを無理矢理引きちぎり、後を向くと勘次とシャルロットのシートベルトも同様に引きちぎる。

「飛び降りろ！」

洋が叫ぶと同時にシャルロット、勘次、そして洋はタクシーから飛び降り、地面を転がる。その直後にタクシーはタンクローリーに突っ込み、タンクローリーが爆発炎上する。

「シャルロット！がんがんじい！無事か!？」

「…僕…私は何とか」

「…わいも」

身体のあるところに擦り傷を作りながら三人は立ち上がる。

「ほう、驚いた。よく脱出出来たものだ」

声の先へと目をやるとそこには先ほどのタクシー運転手、そして手にナイフや警棒など白兵戦武器を持った男達が20人ほどいた。銃を持っていないのは銃声や銃痕、硝煙反応が出る事を恐れているから、と言った所か。

「…何故彼女を…シャルロット・デュノアを狙う!？」

リーダー格らしき運転手を睨み付け洋が吠える。

「何故?決まっているだろう…そいつがシャルロット・デュノアだからだ。卑しい恩知らずな妾の子、シャルロット・デュノアだからだ!」

シャルロットの身体がビクツと震える。

「…妾の…子だと…?」

「それとシャルロットちゃんの命狙うのと何の関係があんねん!？」

続けて鎧を着た勘次が叫ぶ。

「部外者は引っ込んでいろ!シャルロット・デュノア!貴様は卑しい妾の子でありながら父で貴様を拾ってやったレオン社長の恩を仇で返し!我が社の名誉に傷を付け!我が社の秘密を知り過ぎた!その罪は極めて重い!よって我々がデュノア社の『法』に基づき貴様に裁きを下す!判決は…死あるのみ!」

「デュノア…シャルロット、まさか君の父親は…」

「…デュノア社社長のレオン・デュノアです…」

「そして君は…『シャルル・デュノア』だね？」

「…はい」

これで合点がいった。彼女があのだ。『シャルル・デュノア』なら全てが繋がる。

大々的にデュノア社が宣伝していた男性IS操縦者『シャルル・デュノア』は実は女性だった。そしてIS学園にそれが発覚して学園側がデュノア社に正式に抗議したとはニュースにもなっている。

恐らく連中はそのような『不始末』をやらかした彼女の『処分』と、IS学園側に身柄が渡る前に色々と秘密を知り過ぎた彼女の『口封じ』が目的なのだろう。

しかもそれを命令したのは彼女の父親だ…妾の子だから簡単に切り捨てるといふ判断をしたのか。

「黙らんかいこの腐れ外道！シャルロットちゃんには指一本触れさせへんで！」

「ああ！シャルロット、下がるんだ！」

そう言うとき洋と勘次はシャルロットを守るように前に出る。

「僕…私もやります！」

しかしシャルロットは二人と並び立ち構える。

「シャルロット!？」

「危ないから下がるときや!」

「大丈夫です!これでも訓練は受けてますから!」

そして笑ってシャルロットは付け加える。

「それに…『仲間』を放つてはけませんから」

そうシャルロットが言うと二人も黙って笑い返し敵に向かって構える。

「フン、庇い立てなければ少しは長生き出来たものを…やれ!」

運転手の命令が出ると男達は三人に一齐に飛び掛かっていく。

「シャルロットは、やらせない!」

洋は最初の一人に上段蹴りを見舞うとナイフで突いてくる男の腕を取り、背負い投げで地面に叩き伏せると後から迫る敵にソバットを叩き込み、吹き飛ばす。

「そう簡単には!」

シャルロットはトンファーで殴りかかってきた相手に足払いを掛けそのままストンピングで顎を蹴りぬき、続く敵の股間を思い切り蹴り上げ、後の敵の水月に肘打ちを打ち込む。

「痛っ!この野郎!お返しじゃい!」

勘次は殴られながらも自慢の怪力で無理矢理殴り、蹴り、投げ飛ばし敵の数を減らしていく。

「これで最後だ！」

順調に敵は減っていき最後の一人に洋が回し蹴りを叩き込むと敵は全て沈黙する。

「動くな！」

だがサイレンサー付きの拳銃を持った男が拳銃を突き付ける。

「よくここまで戦った。確かに貴様達：特にその男は確かに強い。だがな、例え貴様がどれだけ強くても銃弾よりも速く動けるか？無理だろうなあ！いいか！貴様らの誰かが動けば他の二人は鉛玉をぶち込まれるんだぞ！？そうされなくなかったらおとなしくするんだな！」

男は勝ち誇ったように言い放つ。事実だ。例え洋がその改造人間としての脚力を最大限に生かしても銃弾が先にシャルロットや勘次を貫くだろう。少し距離があり過ぎる。

「だけど…私には！」

ISがある。ISを展開すればギリギリで間に合う。そうすれば二人の盾となる事も出来る。

そうシャルロットは判断すると十字のマークの付いたオレンジ色のネックレス・トップに手を…

「…ない!？」

「捜し物は…これかあ？」

慌てるシャルロットに対して男は嘲るように笑いながらシャルロットが探していたネックレス・トップをわざとらしく見せ付ける。恐らくタクシーに乗せる際に密かに摺ったのだろう。

「万事休すとはこの事だな！妾の子！所詮貴様は愚かなあの女の子供だという事だ！これさえなければ貴様など…只の卑しい娘だ！」

男はシャルロットを嘲るとネックレス・トップを川へと投げ捨てる。

慌てて拾いに行こうとするシャルロットだが、銃撃に阻まれ動きが取れない。

「ハッ、手間をかけさせやがって…死ぬ前に一つ良い言を教えてやる。お前の母親…ミレーユ・バルドーを殺したのはこの俺だ」

「な、何を言つて…!？」

思わず動揺するシャルロットに男は嘲笑しながら続ける。

「ハッ！『乗っていた車が立ち往生して列車に轢かれて事故死』だったか…事故なわけないだろうがぁ！貴様の母親を縛り上げて車もろとも線路に放置しておいたに決まっているだろうがぁ！」

「何で…何で母さんを殺した!？」

「あの女は妾の分際で貴様の養育費と称して社長に『たかり』を働いた重罪人だ！死んで然るべき罪を犯したのだ！そう言えばあの女は最期にこう言ってたなあ…『どうか娘だけは見逃してくれ』と…バカな女だったなあ！自分も助からないのに他人の心配とはなあ！どうせ役に立たなければ始末され、使い捨てられるだけの卑しい妾の子なのになあ！」

「しかし慈悲深い社長は貴様を拾い、汚らしい妾の子である貴様を我が社の為の道具として使って下さったのだ…その恩を忘れて！道具の分際で！自分の意志など…」

「黙れ！！」

怒りのあまり飛び掛かろうとするシャルロットを無言で洋が抑えつける。

「洋さん！邪魔を…！」

思わず食ってかかろうとするシャルロットだが、明らかに様子のおかしい洋を見て黙り込む。

「がんがんじい…彼女を…シャルロットを…頼む…」

洋は静かに、しかし何かを抑えつけるかのように震えた声で勘次に言う。

「…任しといてや」

勘次はそれだけ答えるとシャルロットを下がらせ、自分も後ろへと

下がる。

その直後洋は静かに、ゆっくりと男に向かって歩き出す。

そこにはいつもの爽やかさなど微塵もない、静かな……しかし激しい怒りに燃えている筑波洋の姿があった。

許せない。こいつらだけは許せない。

事情は知らない。聞きたくもない。

だがこいつらは『ネオショッカー』と同じだ。

こいつらは自分たちの都合だけで俺や『先輩』、多くの人々から父を、母を、妹を、大切な家族を、そして仲間を奪い、あまつさえ多くの人々の自由を、平和を、夢を、希望を、幸福を、笑顔を、未来を、心を、そして命すら踏み躪ったネオショッカーと同じだ。

こいつらはただ自分達の都合だけでシャルロット・デュノアの家族を奪った。それに飽き足らずこいつらはただ自分達の都合だけでシャルロット・デュノアの自由を、平和を、夢を、希望を、幸福を、笑顔を、未来を、心を、そして命すら踏み躪ろうとしている。

許せるものか ネオシヨッカーと同じ暴挙を為そうとしている者達を 絶対に許せるものか！！

ゆっくりと歩いてくる洋に対して男は躊躇いもなく発砲する。しかし洋は銃弾をものともせずによりゆっくりと進んでいく。

（ 痛いものか！ ）

痛いものか。こんな銃弾の痛みなど家族を奪われた俺や『先輩』、そしてシャルロットが味わった痛みに比べたらこんなもの、痛いものか！

流石に男は焦って銃を撃ち捲るがそれでも洋は止まらない。

（ 苦しいものか！ ）

苦しいものか。こんな銃撃の苦しみなど『会長』が俺の為に味わった苦しみに そして死んでいった父の、母の、妹の、『先輩』の家族の、多く人々の苦しみに比べたらこんなもの、苦しいものか！

最早男は恐怖の表情すら浮かべながら銃をひたすら撃つが、洋は確実に男の下へと近づいていく。

（ 止められるものか！ ）

止められるものか。そんな銃弾で今シャルロットが、がんがんじいが、そして俺が貴様達に抱いている怒りを 止められるものか！！

そのまま男に手が届く所まで歩み寄ると男が構えている銃を片手で、まるで砂糖菓子か何かであるかのように簡単に握り潰す。そして男の胸ぐらを掴み高々と持ち上げ、拳を固めて全力の一撃を

「…プロのくせに寸止めで気絶するなんて情けないな。口の多さといい大した奴じゃなさそうだ」

拳を顔面に当たる寸前で止めるといつものような爽やかな口調で言い捨て、無造作に放す。

「洋はん…シャルロットちゃんに物凄い悪影響与えかねへんから、そのいつもの爽やかさでそんな悪役じみた事言つの止めてくれへん？」

「ごめんごめん。ついカツとなっちゃって」

いつものような調子で会話を始める二人。

「あ、あの、洋さん。失礼な事になるんですけど…洋さんは…一体…？」

シャルロットがおずおずと洋に尋ねる。銃撃を受けても平然としているのを見ていればそう言いたくもなるだろう。

「…『人間』や」

しかし勘次は平然と答える。

「わいも洋はんもシャルロットちゃんも…みんな『人間』で、わいも洋はんもシャルロットちゃんも…みんな『仲間』や」

「我ながら少し頑丈過ぎるとはたまに思うけどね」

苦笑しながら付け加える洋だが、突如上から降ってきた銃撃を飛び退いて躲す。

「シャルロット・デュノア！本来騒ぎをここまで大きくする気も、貴様にここまでする気は無かったが、やむを得まい…確実に貴様達を消させてもらうぞ！」

「IS！？しかも8機も！？」

「シャルロットちゃん！ちよいと家庭事情が滅茶苦茶過ぎへんか！？」

驚くシャルロットと勘次だが洋は臆さず二人を守るように前に進み出る。

「がんばんじい！彼女を頼む！」

「はいな！」

「待って下さい！」

それを遮るようにシャルロットが叫ぶ。

「どうして…そこまでして助けてくれるんですか？」

シャルロットの問いに洋はいつものように爽やかに答える。

「…君がシャルロット・デュノアだから。君がこうやってここで出会えた大切な仲間、シャルロット・デュノアだから」

「俺は…それだけでもいい」

それを聞くとシャルロットとがんじいは黙って引き下がる。

そして洋はシャルロットを狙うISを睨み据える。

お前達は、許さない。

シャルロット・デュノアの家族のみならず自由を、平和を、夢を、希望を、笑顔を、未来を、幸福を、心を、そして命すら奪おうとしているお前達を

そして俺が愛した空を 父が、母が、妹が、『会長』が、『先輩』が、がんじいが、多くの人々が俺に託した空を 何よりシャル

ロット・デュノアが夢や希望、未来と共に笑顔で見上げるべきこの美しい空を『無限の蒼穹』インフィニット・ストラトスの名を持つ『それ』を使って汚すお前達を

俺は、絶対に許さない！！

右の拳を突き出した後、腰まで引くと同時に開いた左手を前に突き出す。そして左手を円を描くように大きく回し、左斜め上で止める。

「スカイ…変身！！」

入れ替えるように左腕を引き、右腕を左斜め上に突き出すと、ベルトの風車が回り筑波洋の肉体が飛蝗に似た改造人間のそれとなる。

「…セイリングジャンプ！！」

空を愛し、蒼穹を自在に翔ける自由と平和の守護者…8番目の仮面ライダー『スカイライダー』は空を汚す悪を叩き落とすべく、自らもまた『セイリングジャンプ』を使い天空へと舞い上がった。

「スカイパンチ！」

パリの上空で8機のISと筑波洋…スカイライダーは激しい空中戦を繰り広げていた。敵の銃撃を躲しながらスカイライダーは間合いまで接近すると強烈な拳の一撃を見舞う。それを受けてそのISは思わず後退する。

「この！叩き落としてやる！」

敵の1機がミサイルランチャーを呼び出し、スカイライダーに向けて乱射する。

しかしスカイライダーはまるで風に舞い散る花弁のようにミサイルをひらりと躲すとミサイルを放った敵へ接近し、お返しとばかりに突き蹴りの連打をお見舞いする。

「スピードなら…スピードならこちらの方が上の筈なのに！」

IS搭乗者はたった1人で8機のISを翻弄するスカイライダーを見て信じられないと言った口ぶりで叫ぶ。

ISには自前のスラスタに加えてPICが搭載されており、全速力で飛行している最中にその場で急停止したりするなど最新鋭の…超音速で飛行可能な戦闘機すら圧倒する機動力を持つ。

それに対してスカイライダーの『セイリングジャンプ』はあくまで重力低減装置を使って『滑空』しているに過ぎず、最大速度も時速800kmに留まる。

本来ならばISに対して最高速度、小回り共に劣る筈のスカイライダーがISに太刀打ち出来る筈がない。

（理由は簡単だ…お前達は空の飛び方を知らない。それだけだ）

しかしそれをスカイライダーは経験と技量の差で補っていた。

スカイライダー…筑波洋に言わせれば彼女達は『飛んで』などいない。ただ『浮いて進んでいる』だけだ。

ハンググライダーには動力が無い。その為飛行機やIS以上に操縦者の操作がダイレクトに反映される。特に着陸の際にはやり直しが利かない為風向き、風の強さ、着陸地点までの距離、着陸地点の状況、タイミングなどを綿密に、かつ素早く考える必要がある。

筑波洋はずっとそれを続けてきた。これに戦士として悪の組織と戦い続けた経験が加わる事で、どう身体を動かせば銃撃を最小限の動きで躲せ反撃に転じられるか、どういう風に乘ればミサイルを振り切れるかを身体で理解している。

それに比べて彼女達の動作には無駄がある。切れ目がある。隙がある。そこをスカイライダーは確実に突いていた。

「チッ！ならば先にシャルロット・デュノアを！」

そう言つて1機のISが地上のシャルロット達に対してグレネードを発射するが、スカイライダーは先回りしグレネードを自らの身体

を盾にして防ぐ。

「シャルロットをやらせないと言った筈だ！スカイキック！」

そしてそのままお返しとばかりに前方宙返りからの飛び蹴りを放ち、そのISを沈黙させ、地面へと叩き落とす。

そしてそのまま地上へと降り注ぐ銃弾の雨を全て自らの身体を盾とし防ぎ切ると残りの7機へと挑んでいった。

「凄い…あんなスピード差を…こうも…」

シャルロット・デュノアはスカイライダーの戦いを見て素直に感嘆していた。

敵のIS…恐らくラファール・リヴァイヴの改造機…に比べて機動力ではスカイライダーが劣っていることはシャルロットも見ていてよく分かる。

そしてその機動力のハンデすらひっくり返して8機のISを翻弄し、あまつさえつい先程1機を叩き落としたスカイライダーの技術と経験の凄まじさもよく分かる。恐らく長い間、何度となく死闘を繰り

広げていたのだろうとシャルロットは推測する。

「けどこのままじゃ洋さんは…」

同時にシャルロットは不安も抱いていた。

確かにスカイライダー…筑波洋は強い。

だがスカイライダーには飛び道具が無い。いくら経験や技術の差があっても機動力で勝る相手に飛び道具で一方的に攻撃されていたらいつかは被弾するし、やがては力尽きる。

何よりスカイライダーは地上へと…シャルロットへと向かってくる攻撃は全てその身を盾にして防ぎ切ってくれているのだ。今はまだ大丈夫でもいつかはやられてしまうだろう。

だが助けようにも今のシャルロットには戦える力が…ISが無い。先程あの男に川に投げ捨てられてしまった。

ならば飛び込んで探すかと意を決した所に矢田勘次が声をかける。

「…シャルロットちゃんが探してるの、これやろ？」

「勘次さん！？どうしてこれを！？」

勘次が差し出したのは先程川に投げ捨てられた筈の十字のマークのついたオレンジ色のネックレス・トップ。

「いや、あの気絶した男の懐探したら見つかったんや。ISの事はよう分からんけどそう簡単に投げ捨てていいもん違うことくらいは

分かつとるし」

…そうだった。ISコアが新規製造出来ない以上ISを投げ捨てる事など普通はしない。恐らく投げ捨てたのは予め用意していた偽物なのだろう。

「それにISには『大気圏突入』って形があるってのも聞いた事はあるし」

「…そのボケは流石に無理があると思います」

「…やつぱり？」

顔を見合せ苦笑する二人だが、勘次は鎧の顔部分を外しシャルロットに言う。

「シャルロットちゃん、頼む。洋はんを…仮面ライダーを助けてくれんか？シャルロットちゃん、IS使えるんやろ？ならわいの代わりに洋はんと一緒に戦ってくれんか？わい、『日本一のスーパーヒーロー』なんやけど…空は、飛べへんのや」

そんな勘次にクスリとシャルロットは笑いながらも答える。

「…なら『日本一のスーパーヒーロー』の旗は下ろさなきゃ駄目ですな？」

「何言うつとんねん！わいは地上なら『日本一のスーパーヒーロー』がanganじい様やで！せやから地上に敵が来たらわいに任せて、シャルロットちゃんは空の敵を頼んだで！」

「…はい！」

相変わらずの勘次に微笑みながらも頷き、ネックレス・トップを勘次から受け取る。

そして空で独り戦い続けているスカイライダー…筑波洋を見据える。

待って下さい、洋さん。

一夏が『友達』として僕の、私の居場所を守ってくれたように

貴方と勘次さんが『仲間』として僕の、私の命を救ってくれたように

今度は僕が、私が貴方を『仲間』として助けます！！

そしてネックレス・トップから量子化されていたISの装甲が展開され、シャルロットの身体に装着される。

そしてシャルロットは敵には綾やかなる褐色の死を、そして友には

救いの手を差し伸べる生まれ変わった橙の疾風…『ラファール・リ
ヴァイヴ・カスタム2』を装着すると空へと飛び上がる。

「クツ、流石に食らい過ぎたか…」

スカイライダーは銃撃を躲しながらも舌打ちする。僅かながら動き
が鈍りつつある。「よくやったとだけ言っておこう…だがここまで
だ！」

そうリーダーらしき女が言い放つと7機のISはアサルトライフル
の銃口をスカイライダーに向けて一斉射撃を…

「そんな事、させない！」

しようとした所に下から機銃がばらまかれる。

「下！？散開しろ！」

慌てて7機のISが散開して距離を取ると、やがて『ラファール・
リヴァイヴ・カスタム2』を身に纏ったシャルロット・デュノアが
女達の、そしてスカイライダーの目の前に現れる。

「シャルロット・デュノア！？」

「シャルロット…」

そしてシャルロットはスカイライダーに向き直ると微笑みながら言
う。

「助けにきました。大切な仲間を」

「ありがとう、シャルロット」

スカイライダーは無表情だ。だが仮面の下の筑波洋はあの爽やかな笑みを浮かべているのだろう。

その後敵に向き直り言い放つ。

「お前達は…僕の、私の仲間達を傷つけたお前達は許さない!!」

そしてスカイライダーとシャルロットは並んで敵への突撃を開始した。

アサルトライフルで牽制し、接近してくればショットガン、ブレードで迎撃し、時には重機関銃を叩き込む…シャルロットはこれらの動作を一瞬で、的確な判断で行い、敵を翻弄し、追い詰めていく。

『ミラーージュ・デ・デザート
砂漠の逃げ水』…まるで砂漠の蜃気楼のようにとらえ所がなく、しかし確実に見たものの命を削り尽くしていくその戦法を、彼女は得意としている。

近接ブレードで斬り合いを演じていたかと思えば次の瞬間にはアサルトライフルによる銃撃に曝される。間合いを離れたかと思えば至近距離からのショットガンでシールドを削り取られる。

「これが…代表候補生の…力…」

その変幻自在の攻撃に曝され、敵ISの搭乗者は思わず眩ぐがその隙が命取りとなった。

1機が隙だらけと見るや『ラビット・スイッチ高速切替』でアサルトライフルからアサルトカノンへと持ち換えると即座に全弾叩き込む。

「しまった!？」

そしてその機体は悲鳴と共に『絶対防御』を発動させながら墜落していく。

「グッ、同時攻撃だ!同時攻撃ならいくら奴でも対応出来ない筈だ!」

リーダーらしき女が叫ぶと残りの6機が一斉に突撃していく。

「スカイスクリューキック!」

しかしその内の1機はスカイライダーのきりもみ回転しながらの蹴りを受けて叩き落とされ、そこからシャルロットはあっさりと包囲を抜ける。

そのままスカイライダーとシャルロットは残る5機へと突撃していく。

「この！」

「墜ちろ！」

2機がそれぞれスカイライダーとシャルロットに近接ブレードを持ち叩き斬ろうとするがスカイライダーには白羽取りされ、シャルロットにはシールドで受け止められる。

「シャルロット！」

そのままスカイライダーは自分を軸にISもろとも回転し始める。

「洋さん！」

シャルロットもシールドをパージして『灰色の鱗殻』グレー・スケールを相手に突き立てる。

「竹トンボシュート！」

そのままスカイライダーはISを下へ…シャルロットがいる方へと遠心力を付けて放り投げる。

「…撃ち抜く！」

突き立てた状態でシャルロットは敵のISを盾にする形で上へ…スカイライダーがいる方へとスラスターを噴かし突撃していく。

そしてスカイライダーが放り投げた敵と自分が盾とした敵とが衝突した瞬間にリボルバー機構で杭を叩き込んだ後に離脱する。

勿論敵は撃墜された。後は3機。

「クソツタレ！いい加減墜ちろってんだバツタ野郎！」

ヤケクソになったのか1機が槍を持ちながらスカイライダーに突撃してくる。

「甘い！」

しかしスカイライダーはあっさりと躲しふわりと槍の上に立つ。『槍渡り陽炎の術』：スカイライダー99の技の一つであり、自身の体重をゼロにして槍の上へと乗る忍術である。

「こ、この！」

槍を必死で振り回しスカイライダーを振り払おうとISは藻掻くが、スカイライダーが槍の上から離れる気配は無い。

やがてスカイライダーは槍から離れると敵の頭と足を同時に押さえ込む。

そして体を反転させて敵の背中に足を掛け、そのまま一気に落下を開始する。

「クソ！クソ！抜けられない！？」

最早悲鳴近い声が搭乗者から上がると同時に

「三点ドロップ！」

地面に叩きつけられ、『絶対防御』が発動後、そのまま沈黙した。

「流石はんや！」

地上に残っていたがんじいが歓声を上げると同時にもう1機のISが地面へと叩き落とされる。だがまだ搭乗者の意識はあるようだ。

「た、頼む！み、見逃してくれ！」

叩き落とされた敵は地面に降り立った自分を叩き落とした方：自分の方にゆっくりと歩いてくるシャルロット・デュノアに命乞いをする。

「大丈夫、殺しはしないよ…ただちよつと眠って貰うだけだから」

そしてシャルロットはニツコリ笑うと何の躊躇いもなく『灰色の鱗殻』を突き立て、リボルバーに装填された炸薬を全て使い切り杭を敵にぶち込み、沈黙させる。

「シャルロットちゃんって、笑いながら怒るタイプなんやねんな…」

勘次はシャルロットにビビり、何故か『一夏』という少年に笑顔で怒りながら『灰色の鱗殻』で殴りつけるという未来を見ながら呟く。

残る1機はその様子を呆然と見ていたがやがて背を向けて逃走に転じようとする。だが

「逃がすか！ライダーブレイク！」

スカイライダーは専用バイク『スカイターボ』を呼び出すと、それに跨がり、橋桁をジャンプ台代わりにして飛び上がり、装備された高振動発生装着を利用した体当たり技『ライダーブレイク』をISへとぶち当てる。

直撃したISはそのまま地面に落下し、叩きつけられるが、往生際が悪く尚も近接ブレードを持ち、防御用パッケージらしき物呼び出しシャルロットへと突撃していく。

シャルロットはそれを『灰色の鱗殻』で迎撃するが

「残念だが貴様の『盾殺し（シールド・ピアース）』といえどもこの『神の盾』^{イジス}までは貫けまい！」

『神の盾』というパッケージに搭載された重厚な4枚の実体シールドと4重のエネルギーシールドが敵の前面に展開され、それにより『灰色の鱗殻』の一撃は弾き飛ばされ、シャルロットは姿勢を大きく崩してかなりの距離を後退する。

しかしシャルロットは慌てる風もない。

「知ってるよ。それが『ガーデン・カーテン』の発展型として試作された事も、『盾殺し』すら弾き飛ばせるだけの防御力を持つ事も知ってる。私が運用テストを担当していたからね」

「そしてそれを一度前面に展開してしまうと中々元に戻せなくなる事も、展開中は突撃と振り向くくらいしか出来なくなる事も、回避も攻撃も出来なくなる事も、知ってる」

「だからお前に」

「…俺の攻撃が躲せない事もな！」

シャルロットの言葉に応えるように男…筑波洋の声が聞こえると、女はハイパーセンサーを使い筑波洋を…スカイライダーを探す。そして見つける。

後だ。スカイライダーは自分の後の上空にいた。

(…嵌められた！)

女は気付く。自分はまんまとシャルロットに嵌められたのだと。

気付くべきだった。

あの馬鹿げた数の武装を最適な状況、最適な形で使い分けられるのも、『高速切替』を戦闘で最大限活用出来るのも、『砂漠の逃げ水』などというえげつない戦術が取れるのも、奴の…シャルロット・デユノアの器用さと戦術眼、状況判断力、分析力、観察力、決断力…優れた頭脳があつてこそなのだ。

あの『盾殺し』は『見せ餌』だ。私に『神の盾』を展開させ、反撃も回避もせずに本命の一撃を叩き込む為の『布石』だ。奴はその為の『捨て駒』だ。

奴は自分と私とあのバツタ男の位置関係を、速度を、そして予測され得る行動を一瞬で計算、分析し、私が防御し、その隙を突いてあのバツタ男が私に本命の一撃を叩き込むのに最適なタイミングで『

盾殺し』を突き出した。

そして私はまんまとそれに釣られて『神の盾』を展開し、今は反撃も回避も間に合わない状態だ。奴は私が何を考え、どう行動するのか…そして私の読みすらも読んだのであろう。

見事だ、シャルロット・デュノア。負けを認めよう。今までの貴様の戦術は、読みは私を凌駕していた。だがまだこの勝負は終わっちゃいない。所詮は小娘、最後の詰めが甘いな。

こちらには『神の盾』がある。そして振り向くくらいの事は出来る。つまり反撃も回避も出来なくとも、『神の盾』を使いあのバツタ男を防御する事は出来る。

そうすれば後は『神の盾』を格納して、『盾殺し』を弾き飛ばされたいせいで姿勢を大きく崩している貴様を追撃し、そのまま貴様を殺す事が出来る。

たった一つの…しかし痛恨の読み違いだな。そしてそれが戦場では命取りになる。この勝負、最後に勝つのはこの私だ。

貴様が犯したたった一つの重大なミス。

それは『神の盾』の性能を見くびっていた事だ。

この防御を…このパッケージを…

「この『神の盾』を貫けるものか…！」

そして女はスラストーとP I Cを駆使してスカイライダーに向き直ると、『神の盾』をスカイライダーへと向ける。

しかしスカイライダーはそれに構わず空中前方宙返りを…『スカイキック』より回数の多いそれを繰り返し、そして真っ向から渾身の蹴りを敵へ放つ。

「大回転…スカイキイイイイック…！」

（僕が…私がこうも読み違えるなんて…！）

シャルロット・デュノアは自分の読みには自信があった。

読みが正しかったこそ第2世代相当の『ラファール・リヴァイヴ・カスタム2』で第3世代相当の他の専用機と渡り合ってた。

読みが当たってきたからこそ『砂漠の逃げ水』で多くの敵を翻弄し、追い詰め、そして撃破する事が出来た。

そんな自信を持っていた読みが、外れた。しかも大きく。

シャルロットはあの女が『神の盾』を展開したまま振り向き、スカイライダー…筑波洋の攻撃を防御するだろうと読んでいた。

そしてその読みまでは見事に当たっていた。

だがその先は完全に外していた。

本来ならばスカイライダーの攻撃でこちらに背を向けたISに対して体勢を立て直して本命の一撃を叩き込むつもりだった。

スカイライダーの攻撃もまたこちらの攻撃の『布石』であった。

だが、その読みは裏切られてしまった。

予想外の事態の展開の早さに体勢を立て直して敵に突撃するどころか、体勢を立て直す事すら叶わなかった。

（…私が読み違えるなんて…些細な事！だって僕達は、私達は…こうやって勝ったんだから！）

しかしシャルロットには悔しさは無い。むしろ嬉しいくらいだ。

確かにシャルロットの読みは大きく外れたが、それは『嬉しい誤算』というものだ。

シャルロットの視線の先にあるのは、自慢の『神の盾』が何か強い衝撃を受けてひしゃけた状態で地面に伸びている先程のIS及びその操縦者の姿。

そして鎧の上を脱いだがんがんじいこと矢田勘次と、スカイライダーの姿からいつもの姿に戻った筑波洋の二人がいつものように談笑している姿。

スカイライダーの正義が、怒りが、信念が、誇りが、心が、魂が、そしてシャルロットと空への思いが込もった必殺の一撃は、『盾殺し』ですら撃ち抜けなかった『神の盾』すら蹴り抜き、ISをも撃破する程の威力を持っていたのだ。

「シャルロット！怪我はないかい？」

「シャルロットちゃん！ほんまさっきの戦い格好良かったで？」

そんな二人が笑顔を浮かべてシャルロットの下に歩いてくる。

「…はい！ありがとうございます！」

そしてシャルロットもまた満面の笑みで『仲間』に答える。

（けどあの威力はちょっと…反則じゃないかな）

そんな負け惜しみを一瞬心の中で呟いた後、シャルロット・デュノア、矢田勘次、そして筑波洋の三人は平日のパリの街を再び並んで歩き始めた。

「き、貴様達！これは一体どういふつもりだ！？」

デュノア社本社ビルにある社長室の中でレオン・デュノアは叫んでいた。

レオンが座る社長室の机と椅子の前にはデュノア社の役員達が並び立ち、一斉に辞表と『デュノア社再建計画書』という書類を社長であるレオンに突き出していた。

「社長！これは我が社の存続に関わる危機なのです！ここは社長も是非ともお辞めになって下さい！我々もお供致します！」

「黙れ！それにこちらの書類は何だ！？」

「…それは我々『国際ＩＳ委員会』の勧告を受けて貴社の取締役会が取り纏めたデュノア社の再建計画書です」

そこに男が…デュノア社のメディカルセンター所長の志度敬太郎博士が入ってくる。

「博士！これはどういう事です！？」

「…貴方に国際ＩＳ委員会からの通達があります…『シャルル・デュノア』に関連する貴社の一連の行動は、『ＩＳ運用協定』及びその理念・条文に基づき設置された『ＩＳ学園』に対する重大な背信行為であり、国際ＩＳ委員会はこのような事件を起こした貴社を

処罰すると同時に、再発防止の徹底を強く求めるものである』。詳細はこちらに」

志度敬太郎は国際IS委員会の一員としてレオンに告げ、国際IS委員会からの通達書を机に置く。

「追徴金2億ユーロ…それと国際IS委員会からの監査役派遣…」

「ええ。それが貴社に下された処罰です。そしてそこにも書いてある通り私、志度敬太郎が貴社の監査役としてこの度赴任して参りました。早速ですがそちらの書類にも目を」

そしてレオンは『デュノア社再建計画書』に目を通す。

「…ふざけるな！『当社によるシャルロット・デュノアへの全面的支援を継続』！？『始末屋』の解散』！？『社長含む役員の引責辞任』！？こんなものが認められるか！」

「これは貴社の役員会の総意であり、緊急株主総会での承認も、国際IS委員会もこの内容で認可を出しております」

やられたとレオンは悟る。

社長である私抜きで役員会が、株主総会が開かれこれらの事が決定され、国際IS委員会へと提出された。

私に拒否させない為だ。私がどうあがいても拒否しようがない状況に追い込む為だ。受け入れるしかない。

「貴様ら…私に逆らうのか！？あの卑しい妾の子の肩を持つのか！？」

それでもレオンは無駄とわかっていても叫ぶ。

「…その傲慢さが今回の事態を招いたのでは？」

しかし志度敬太郎の厳しい視線にさらされると、レオン・デュノアは黙ってうなだれる事しか出来なかった。

社長室を出ると志度敬太郎は携帯電話に着信が入っている事に気付く。シャルロット・デュノアからだ。

レオン・デュノアが『始末屋』にシャルロットを始末するように命令した事は知っている。しかも極秘裏に設立した虎の子のIS部隊を投入してまで、だ。

（デュノア社から提出された『ロストコア』に関する届け出を洗い直す必要があるかもしれないな）

ISの中枢部であるISコアはISの開発者である篠ノ之束にしか

製造出来ない。そして彼女がある時期を境にISコアの製造を止めた為、ISコアの467個から増える事は無くなり、ISの絶対数も467機に制限された。

もつとも、無人ISらしき機体の出現やそれに未登録のコアが搭載されているともIS学園から報告されているが。

しかしこの『467』というのはあくまで『篠ノ之束がコアの製造を止めた時点』において『正式に登録されていた』コアの数に過ぎない。

実際の所はそれ以前に破損、紛失、所在不明、廃棄等の理由により登録を抹消され、467個の内に数えられていないISコアが存在する…これが『ロストコア』である。

例えば世界初のIS『白騎士』及び第1回モンド・グロッソ優勝機『暮桜』のコアは所在不明となっており、先述の467個の内には含まれない『ロストコア』である。

もつとも、それと入れ替わるような形で新たに登録された『白式』のコアがそれという可能性も高いと敬太郎は睨んでいるが。

或いはデュノア社が『ロストコア』として届け出ていたコアの中には、今回のように非合法活動に使用されるISに使われているものもあるのかも知れない。

そんな事を考えていたがそこで思考を中断し、シャルロットに電話を掛け直す。するとシャルロットが電話に出る。声を聞くかぎり特に問題なさそうだ。

「シャルロット君？その様子では無事、みたいだね」

『お陰様で。親切な人たちに助けてもらえたから』

どうやらシャルロットを助けた勇敢な人物がいたらしい。

『それでその助けてくれた人が博士に…「会長」に「今夜久しぶりに会えるのを楽しみにしてます」って伝えて欲しいって…』

敬太郎は誰がシャルロットを助けたか確信する。

かつて自分が改造手術を施し、『志度ハンググライダークラブ』を拠点に共にネオシヨッカーと戦った男。

罪悪感に囚われていた私に悪と戦う力を与えてくれたと感謝した、明るく勇敢で、優しい男。

そして博士としてではなく、彼の亡くなった親代わりとして彼の身体を何度でも治そうと誓った『息子』同然の男。

「…分かった。なら彼に…『息子』に伝えてくれないか？シャルロット・デュノアを…『娘』を助けてくれて本当にありがとう、と」

そしてシャルロット・デュノアもまた私の大切な患者であり、『娘』同然に思っている。だから彼に…筑波洋に礼を言いたい。

『…分かりました。必ず伝えます』

「ああ、シャルロット君も元気だね？」

そこで志度敬太郎は電話を切り、再び社長室の前から歩き出していた。

「…そっか。会長はそう言ってたんだ…ありがとう、シャルロット」

「はい、どういたしまして。『洋兄さん』」

「…出来ればそれは止めてくれないかな？」

「すみません、ちょっと調子に乗っちゃって…」

志度敬太郎からの電話の後、パリの路地裏でシャルロット・デュノアと筑波洋は暫く共通の『父』である志度敬太郎博士の事について話していた。ちなみにその関係でいくと洋は『兄』、シャルロットは『妹』に当たる。

「俺の方こそ感謝してるんだけどね」

洋は笑いながら志度敬太郎について話す。

事実だ。会長は洋の命を救い、悪と戦う力を与えてくれた。それを感謝している事に偽りはない。

（そう言えば妹も、シャルロットと同じくらいだったよな…）

ふと洋はシャルロットに亡くなった自分の妹の姿を重ね合わせる。

かつて洋はネオショッカーの陰謀により父と母と妹を事故に偽装され、引き離された。

その後父と母はネオショッカーに捕えられた後で…そして妹はその時の『事故』で…

「…洋さん？」

そんな事を考えている洋の顔をシャルロットが覗き込む。

「あ、いや、何でもないよ…がんがんじいが戻ってきた…どうだった？」

「あかん、どこもかしこもマスコミだらけや」

そこにがんがんじいこと矢田勘次がやって来て伝える。

どうやらマスコミはつい先程発表されたデュノア社長以下役員全員が引責辞任するまでのスキャンダルを中心人物である『シャルル・デュノア』ことシャルロット・デュノアを取材しようと言うのだから。

カメラマンをしている先輩がいたら無神経にも程があると激怒しかねないが、それだけ『シャルル・デュノア』の存在は世界で大きかったという事だろう。

「流石にあれだけ派手に暴れたら気付くか…と言って捕まったら飛行機には間に合わないし…」

洋は暫し思案する。あの様子じゃ捕まったらシャルロットは簡単には解放されないだろう。そうすれば飛行機には乗れなくなる。つまりマスコミ陣を出し抜き、かつ迅速に彼女を空港まで送り届ける必要がある。

「おつ、この『カブ』まだ動くで。こんなん捨てて勿体ない」

「何でゴミ漁りしてるんですか!？」

「いや、あいつら何とかするのに何か使えそうなものはないかと」

「あ、すいません…」

「だからそこはツツコミ入れてくれな!」

「私漫才師じゃありません!」

『ホンダ・カブ』をゴミ捨て場から出しエンジンをかけてみる勘次にシャルロットがツツコミを入れる。

暫くそんな事を続けながら勘次はゴミ捨て場を一望する。この辺りにある店のものだろうか。ショーケースやらマネキンやらカツラやらが纏めて…

「…マネキン?…カツラ…洋はん、ちょっと」

勘次は洋が近寄ってくると何やら耳打ちをする。

「…なるほど！いいアイデアだ！」

「せやる？」

「あ、あの…」

二人の様子に首を傾げるシャルロットだが、何やら準備を終えると二人は向き直りいつものように笑いかける。

ただし洋の手にはスポーツバッグから取り出したハンググライダー用のヘルメットとゴーグルとハーネスが、勘次の手にはマネキンと金髪のカツラがそれぞれある。

「シャルロットちゃん、ちょっと頼みがあるんやけど…ええかな？」

「…君の『ある物』を俺達に使わせて欲しいんだけど…」

そう言つて二人は笑いながら続ける。

（二人とも何か…面白い悪戯思いついたって顔してる…）

シャルロットは二人を見て何となくそう感じていた。

テレビ、新聞、雑誌などマスコミの取材陣がこのパリの街に大勢詰めかけていた。

世界二番目の男性IS操縦者『シャルル・デュノア』が実は女性で、しかも産業スパイまがいの事をしていた。

しかもその事をIS学園がフランス政府やデュノア社に抗議し、フランス政府要人やデュノア社首脳部が一斉に引責辞任した事。

こんな極上のネタになりそうなスキャンダルの渦中にある『シャルル・デュノア』を取材したくないと思わないマスコミ関係者やライターはいない。

そこでマスコミ陣はデュノア社の本社があるパリへと詰めかけていたのだが、そこに『シャルル・デュノア』の搭乗ISで専用機の『ラファール・リヴァイヴ・カスタム』が何者かと交戦しているという情報が入り、現在ではまだ街中にいるであろう『シャルル・デュノア』をマスコミ総出で探しているというのが現状である。

「いたぞ！『シャルル・デュノア』だ！」

帽子を被った日本人らしき男のカメラマンが叫びながら指指す。

そこには『カブ』に『日本一』やら何やら書かれている変な幟を背中に立てている変な鎧を着た男と同乗している金髪の少女らしき人物が乗っている。上半身しか分らないが、着ているのはIS学園の制服に間違いない。

それを見るや取材陣は一斉に走り出す。すると『カブ』は速度を上

げ逃げるように走りだす。間違いない、あれは『シャルル・デュノア』だ。

暫く追い駆けつこが続くが、やがて観念したのかゴミ捨て場の前でカブは止まる。

すかさず取材陣はカブを取り囲みマイクやカメラを向けるが…

「…何やあんたら？さつきからずっと人追いかけて回して…後ろに乗せてた『マネキン』捨てるとこなんか取材してそんな面白いか？」

…後ろに乗っていたのは『シャルル・デュノア』と同じ髪色・髪型をしたカツラを被せられ、IS学園の男性用制服を着せられていた、ただの『マネキン』であった。

「それとも何か？この『日本一のスーパーヒーロー』ががんじい様の取材に…あら？もうどっか行きよったか」

そして自分達が追っていたのが見間違いであったと判断するや取材陣は一言ががんじい…矢田勘次に謝罪するとさっさと『シャルル・デュノア』探しを再開し、勘次の前から姿を消していた。

勘次はマネキンをゴミ捨て場に入れて一息をつく。

「…『足手纏い』になるかと思えばいい働きをしたじゃないか、『日本一のスーパーヒーロー』さん？」

そこに先ほど『シャルル・デュノア』を見つけたと真っ先に叫んだ帽子を被ったカメラマンが声をかける。

「…ありがとうございます。お陰様で予想以上に上手くいきましたわ」

「なに、ああいう無神経な輩にはあれ位やってやった方がいいのさ。それにジャーナリストを名乗るならマネキンと気付かず俺の言葉を鵜呑みにする方が悪い」

「しかしよく一発でマネキンって分かりましたなあ…」

「目には自信があるのさ。カメラマンとしても、それ以外にも、な」
そう言つて帽子の男はニヤリと笑う。

この帽子の男カメラマンと勘次は『グル』である。

シャルロット・デュノアをマスコミから逃がすべく、彼女から今後使う予定はないであろう『IS学園男性用制服』を譲り受けた勘次は、シャルロットと同じ髪のカツラを被せたマネキンに着せて、カブで街中を走り回りマスコミを攪乱する作戦を行った。

帽子の男は真つ先にそれを看破したのだが、知り合いである勘次から事情を聞くと勘次に協力し、真つ先に『シャルル・デュノア』を見つけたと叫んでみせた。

そのお陰でマスコミはまんまと勘次の陽動に引つ掛かったという訳だ。

「しかしシャルロットちゃんから何を聞こうと？」

「素顔の『織斑一夏』の事を、な」

帽子の男は笑って勘次に答える。

帽子の男もシャルロットを取材する目的でパリに来たのだが、他の取材陣と違って『シャルル・デュノア』絡みの一件には一切興味が無い。

元々男は世界最初の男性IS操縦者として話題になっている『織斑一夏』の素顔を、素の表情を、そして自然な笑顔を写真にしたいと考えていた。

その為IS学園に織斑一夏への取材を申し込んだのだが、IS学園の教師に…男曰く「弟独占を企む姉の組織『おとう党』大幹部にして日本支部長『千冬姉』、その正体はブラコン怪人『ブリュンヒルデ』」に拒否されたらしい。

そこで男は現在フランスにいるという織斑一夏の元ルームメイトに話を聞こうとパリまで足を伸ばしたのだが、そこで旧知の勘次と再会し、粗方の事情を聞いて勘次に協力した…というのが事のあらましである。

「ところで『彼女』と『あいつ』は？」

「…きっと今頃はええ風に吹かれてるんと違いますか？」

「…なるほど、『あいつ』らしいな」

そう言つて勘次と男は空を見上げる。

「…それじゃ、達者でな。シャルロットちゃん」

そして矢田勘次は空を見上げながら『仲間』のシャルロット・デュノアへと思いを馳せるのであつた。

「どうだい？風の感触は？」

「確かに筑波さんが言つた通りです。冷たくて、鋭くて、でもそれでいて温かく優しく包み込んでくるような…飛行機やISじゃ味わえないそんな不思議な感覚で…」

「そうだろ？」

シャルロット・デュノアは筑波洋と共にパリの上空を飛んでいた。

ヘルメットとゴーグルを装着し、身体をハーネスできっちりと固定しているシャルロットの姿は、まるでハンググライダーで飛んでいるようだ…実際はハーネスで固定しているのはグライダーではなくスカイライダーに変身した状態の筑波洋であるが。

矢田勘次の提案した作戦は勘次がおとりとなっている間に洋がスカイライダーに変身して、『セイリングジャンプ』を使ってシャルロットを直接空港まで送り届ける、というものであった。

確かにこれなら地上と違い交通渋滞も取材陣に捕まる心配もない。それにセイリングジャンプもISにこそ劣るがかなりの速度が出るので時間の短縮にはもってこいだ。

「ありがとうございます、洋さん。私の為にわざわざこんな事……」

「『仲間』の為さ、これくらい何ってことないよ」

感謝するシャルロットに首を振る洋……スカイライダー！

「……一夏にもこの感覚、味あわせてあげたいな……」

「なら一夏君とグライダーを始めたらどうだい？俺で良かったら喜んで教えるよ」

「……考えておきます」

そう言っただけで笑うシャルロットを微笑ましく思いながらも洋は空へと思いを馳せる。

い。この世界は 俺達を守ってきたこの世界は変わったのかも知れない。

ISが登場してからこの世界は大きく変わった。軍事も、社会も、政治も、経済も 或いは人の心や正義の意味でさえも変わったのかも知れない。

それでも俺は変わらない。

例えば人の心が変わり、正義の意味も変わったとしても

人々の自由を、平和を、夢を、希望を、笑顔を、幸せを、未来を、そして俺が愛し、シャルロットが笑って、喜んで、恋をして、そして夢と希望を持って見上げられるこの美しい空を守れるのであれば

「俺は、それだけでもいい」

「…洋さん？」

「あ、いや、何でもないよ…それよりそろそろ到着だから準備だけはしておいてくれないか？」

そう言うとシャルロット・デュノアとスカイライダー…筑波洋は『シャルル・ド・ゴール国際空港』付近に着陸する為のアプローチに入る。

こうして殺伐としてドタバタとした、長い長い『パリの平日』は漸く幕を下ろしたのだった。

『デュノア・スキャンダル』の背景には熾烈な新型機開発競争に加え、『オリムラ・ショック』以来世界に蔓延していた男性のIS操縦者を求める風潮があった。

恐らく開発競争が、女尊男卑の風潮が続く限り『デュノア・スキャンダル』の根は消えないであろう。

『デュノア・スキャンダル』は単にデュノア社という一企業が起こした不祥事というだけではない。これはISという兵器が生み出した負の側面を如実に現した『警鐘』なのだ。

だからこそ、第二の『デュノア・スキャンダル』を防ぐ為にも、第二の『シャルル・デュノア』を生み出さない為にも、我々はISという兵器と負の側面も含めて真摯に向き合っていかなければならない。

この『デュノア・スキャンダル』は新たにISという兵器を生み出した人類全体への宿題と言えるだろう。

以上、飛田今太『「オリムラ・ショック」と「デュノア・スキャンダル」 男性IS操縦者の光と影』（民明書房）より抜粋。

（後書き）

最後まで拙作をお読み頂き誠にありがとうございます。

最早原作を汚す以外何者でもない暴挙を犯していますがまたも欲望と衝動の赴くままに書き上げてしまいました。

今回このような組み合わせを考えましたのは、個人的に性格面で筑波洋とシャルロット・デュノアには類似点があると考えた事と、『母を失った』という点で一番印象に残っていたのが筑波洋だったからという最早こじつけすら不可能なくらい漫然とした理由からです。

むしろ家族『を』利用された筑波洋と家族『に』利用されたシャルロット・デュノアは対照的と言っていいのかも知れません。

最後になりましたが、拙作を最後までお読み頂いた事に感謝申し上げます。後書きとさせて頂きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8033y/>

パリの平日

2011年11月23日21時52分発行